

現代美術館だより

20

今月も前号に引き続き、ガラスの回廊沿いにある2点の作品を紹介いたします。

作品紹介⑩ 「光の橋」

アナ・ラウラ・アラエズ作

美術館西側、官庁街通りに面し、通りからもよく見える作品がスペイン出身のアナ・ラウラ・アラエズ（1964年生まれ）による「光の橋」です。透明なガラスでできた光・色・音楽を組み合わせた作品です。観客は階段を上がり、ネオンで照らされた六角形のトンネルに入り、空間そのものを五感



「光の橋」

で体験することが出来ます。トンネルの形状は背骨がモチーフとなっており、身体性が強く意識されています。心地よいサウンドと光に包まれるうちに、スピリチュアルな瞑想の世界を経験することができます。アラエズは建築と彫刻の中間に位置するような空間作品を主に作ってきました。アートと生活に境界はないと考える彼女は、ファッションや音楽から影響を受け、枠にとられない自由で横断的な表現を手掛けています。日本では当館が初公開となっています。この作品は、昼間より少し薄暗くなった夕方がお勧めです。展示室全体が幻想的なブルーに彩られ、昼と夜で違った表情を見せます。ぜひ、一度歩いてみてはいかがですか。

作品紹介⑪ 「ザンプランド」

栗林隆作

「光の橋」の筋向いにあるのが、長崎県出身の栗林隆による「ザンプランド」です。一見すると、白い机や椅子がある無機質な部屋ですが、天井からは何やら得体のしれないものがぶら下がっています。天井に開かれています。覗き穴を見てみると、そこには…。おっと、これ以上は「ネタばれ」になるので、やめておきましょう。

栗林は1968年生まれ。父の栗林慧さんも日本を代表する昆虫写真家として知られています。



「ザンプランド」

栗林は壁裏、天井裏といった空間に異空間を挿入し、「境界」をテーマとした作品を作り続けています。物事の異なる側面を喚起させ、新しいものの見方を提示するのが、彼の作品の大きなテーマです。十和田市現代美術館では、これまでの美術館の展示の常識を覆す「成長続ける空間」「季節によつて景色を変え、見る人に違う体験を与える空間」を作り出しています。本作品は一度に一人しか覗けないため、お待たせすることもあります。当美術館の中でも人気の高い作品の一つです。

それで結局覗けば何があるのか？ヒントを言うと、「ザンプランド」とは「湿地帯」を意味するドイツ語です。

問い合わせ先

十和田市現代美術館 (☎20-1127)